

NPO 法人あらかわ学会による東京都足立区の「里帰り桜」に関する調査結果報告

Survey report of "homecoming cherry blossoms" in Adachi Ward, Tokyo, by the specified nonprofit corporation Arakawa gakkai

矢澤優理子*・鈴木誠**

Yuriko Yazawa, Makoto Suzuki*

Abstract: This report discusses the results of a survey on homecoming cherry blossoms in Adachi Ward, Tokyo, conducted by the nonprofit organization Arakawa Gakkai since from 2021 to 2024 (the survey is still ongoing). The homecoming cherry blossom refers to cherry trees that originated on the banks of the Arakawa River in Adachi-Ward and were migrated to the United States. Their descendants were then brought back from the United States and planted in Japan. Chapter 1 provides a brief description of homecoming cherry blossoms and the background of our survey. Chapter 2 describes how cherry trees planted on the banks of the Arakawa River were transferred to the United States and brought back to Adachi Ward. Chapter 3 describes the current status of homecoming cherry blossoms planted in all elementary and junior high schools in Adachi Ward, Japan—specifically, the number of blossoms planted there. Chapter 4 describes the results of interviews with school officials and teachers regarding the use of homecoming cherry blossoms. The findings described in this report are useful for future academic research, as the blossoms are a unique local resource in Adachi Ward and should be preserved for future generations.

Keywords: homecoming cherry blossoms, Adachi Ward, the Arakawa River, school

キーワード: 里帰り桜, 足立区, 荒川, 学校

1. はじめに

特定非営利活動法人 (NPO 法人) あらかわ学会 (以下あらかわ学会) は、河川と地域のよりよい関係を目指すためのまちづくりに関する調査・研究・活動を行う NPO 法人である。1996 年の設立以降、自然環境や河川技術者等の専門家および河川流域の市民らがメンバーとなり、各人が専門分野を活かして活動に取り組んでいる。あらかわ学会では、筆者らが中心となり、2021 年度から東京都足立区内の各地に生育している「里帰り桜」(図-1) の現況調査を進めてきた。本稿では、これまで 2 年間にわたって進めてきた、(1) 里帰り桜の誕生経緯の文献調査、(2) 足立区内の小中学校における里帰り桜の現況調査、(3) 学校関係者への里帰り桜の活用方法に関するインタビュー調査の各結果について触れ、里帰り桜を継承していく際の課題について考察することとする。

(1) 「里帰り桜」の概要

「里帰り桜」とは、アメリカから寄贈され、足立区内の各所に植樹されたサクラのことを指し、「ワシントン桜」や「レーガン桜」と呼ばれることもある。「里帰り桜」の誕生の契機は、1912 (明治 45) 年にさかのぼり、日米友好の証としてアメリカに贈呈された荒川堤のサクラが、ワシントン・ポトマック公園に植樹されたことに端を発する。ポトマック公園は、以降、この時のサクラの子孫をはじめ、各種のサクラが植樹されて花見の世界的名所となった (図-2) が、一方で、故郷・荒川堤のサクラは、第二次世界大戦や荒川放水路の開削工事のほか、工業化や急激な都市化によって枯死してしまった。これに危機感を抱いた当時の足立区民・職員らが、その後足立区の区制 50 周年事業の一環として、ポトマック公園のサクラの里帰りを企画し、荒川堤のサクラの子孫が「里帰り桜」として無事に足立区に里帰りを果たした。そして、この時の里帰り桜は当時足立区内にあった都市公園等と、全ての小学校・中学校に植樹され、今日も現地で良好に生育しているものがある。

(2) 「里帰り桜」の調査経緯

このときの「里帰り桜」について、区内公園では一木単位での実態把握が行われている^{1,2)} 一方で、小中学校においては、校内のどこに何本の里帰り桜があるか等の実態把握が全く行われてこなかった。現在、足立区の学校では統廃合や校舎の改築が進み、すでに伐採されている里帰り桜もあるという。公園や荒川左岸に植樹さ



図-1 里帰り桜と解説版 (右上)・表示板 (右下)

※解説版: 里帰り桜に関する解説文章があるもの

表示板: 里帰り桜の表示のみのもの

左側・右上: 高野小学校 (2021 年 12 月 22 日撮影)

右下: 舎人小学校 (2022 年 1 月 28 日撮影)

*東京大学空間情報科学研究センター/NPO 法人あらかわ学会, **東京農業大学グリーンアカデミー/NPO 法人あらかわ学会

*Center for Spatial Information Science, The University of Tokyo /Specified Nonprofit Corporation Arakawa Gakkai,

**Tokyo NODAI Green Academy/Specified Nonprofit Corporation Arakawa Gakkai



図-2 ワシントンDC タイダルベースンの桜
(2012年3月26日撮影)



図-3 足立区都市農業公園（荒川堤防上）の五色桜
(2011年4月25日撮影)

れた里帰り桜も衰退が進んでおり、空間と時間を超えて保全がなされてきた地域資源としての荒川堤のサクラは、再び危機に陥っている。

そこで、あらかわ学会では、区内の小中学校に植樹された里帰り桜の現況と実態を把握すべく、文献調査、現地調査、関係者への聞き取り調査等を実施し、里帰り桜を後世に継承していくため方法と課題を提案することとした。以下では、まず、2章で文献調査によって明らかになった里帰り桜の誕生経緯を述べ、3章で足立区内のすべての小・中学校（2021年4月現在）に赴いて行った現地調査の結果を述べる。さらに、4章では、里帰り桜を継承していくための方法の一つとして学校教育への活用を取り上げ、学校関係者に教材として里帰り桜を活用する場合の希望やその方法についてインタビュー調査をした結果を述べることにする。

2. 文献調査による里帰り桜の誕生経緯

(1) 花見の名所「荒川堤」

埼玉県熊谷市から東京・千住に至る約60kmの荒川の堤防（熊谷堤と呼ばれた）のうち、荒川左岸の埼玉県川口市から西新井橋付近の堤防上は、明治・大正期には各地からサクラの見物客が訪れる日本有数の花見の名所であった。1885（明治18）年の大洪水を契機として、①夏の緑陰、②花見の名所、③堤防の補強、④洪水時の舟係留杭、として役立てるために堤防修築と桜植樹が地元（足立区江北）から提起されたことが背景であった³⁾。1886（明治19）年には駒込伝中（現六義園周辺）の植木屋「梅芳園」から仕入れたサトザクラ78種3,225本の苗木の植樹が行われた。梅芳園には、江戸時代の桜の名園・松平定信の浴恩園（現築地市場跡）ほか大名庭園などから、散逸を免れ集められた貴重なサトザクラ類が集められていた⁴⁾。

荒川左岸に植えられた五色桜は、「荒川の五色桜の桜守り」とよばれた地元の船津静作らにより育てられたのちに植樹された。その後、明治時代後期（1903～1912）には、「桜博士」こと東京帝国大学教授 三好学博士が研究フィールドとするなど、有名なサクラの名所となった。なお、荒川堤のサクラ並木は、人々から「荒川の五色桜」、「江北の五色桜」として親しまれたが、「五色桜」とは品種名ではなく、花の色が白色、桃色、緑色、紅色、濃紅色など、五色に咲いたことから名づけられたといわれている⁵⁾。

1912年に日米友好の証として贈られた6,000本余のサクラの苗木は、78種の内ソメイヨシノやカンザンを含む11種から選ばれた徳木が、兵庫県伊丹市の台木で育てられたものだった。なお、6,000本のうち3,020本が東京市からアメリカに寄贈され、残り

3,000本は、高峰譲吉博士の経費負担で、ハドソン川開発300周年記念としてニューヨークに寄贈された。1912年の寄贈に先立ち、1909年には2,000本のサクラが贈られていたが、これは病害虫のため、アメリカの検疫所にて全て焼却処分されたため、このときには万全の態勢で再寄贈の準備が進められたという⁶⁾⁷⁾。

荒川堤のサクラ並木は、その情景は、『虞美人草』（夏目漱石、1907）、「花見の船」「東京の桜」（大町桂月、1916）、宮澤賢治の短歌（1922）などの文学作品にも紹介された⁸⁾。

その後、現地では、一部には枯死したものもあったが、植え足しによって植樹場所も拡張・拡大された。しかし、1911年開始の荒川放水路（現荒川）開削事業（当該地区は1913年頃着手）により桜は伐採され、また沿川化学工場の煤煙（煙害）や太平洋戦争の影響（薪利用）により1947年頃には消滅してしまったと言われている⁹⁾。荒川堤は、サクラ並木の美しさから、1924年には名勝「荒川堤（桜）」として国の名勝に指定されていたが、1959年には名勝指定解除となった¹⁰⁾。現在は、1991年度・1993年度に足立区主導で行われた「桜づつみモデル事業」などによってさらにサクラが植え足され、荒川堤では立派なサクラ並木がみられる。この事業では、里帰り桜の苗を利用して区内の荒川左岸堤防上約300m（堀之内地区）に桜18品種120本が植樹された¹¹⁾。また、現在では荒川の五色桜の品種多くが復元され、足立区都市農業公園などで開花している（図-3）。

(2) ワシントンからのサクラの里帰り

上述の通り、里帰り桜は日米友好の証として海を渡った荒川堤のサクラの子孫がワシントンから足立区に戻ってきたものであるが、ワシントンのサクラの里帰りは、1952年と1982-1984年の2回実施されている。1952年の第1回目の里帰りは、日米講和条約締結などに因んで、ポトマック河畔の公園から55本の桜の接穂が送られてきたものである。しかし、この接穂から育苗され、区内の荒川堤防に植樹された367本の桜苗は、活着・生育共にあまり良好ではなかった。それに追い打ちをかけるように荒川左岸沿いに首都高速川口線の工事が行われ、残った桜は1981年に近くの五色堤公園に移植された。現在残っている第1回目の里帰り桜は、五色堤公園に移された桜のみである¹²⁾。

第2回の里帰りは1981年から準備され、里帰り桜の植樹は1982年から1984年にかけて、3か年の事業として実施された。現在、足立区内の小・中学校に植樹されている里帰り桜は、この第2回目の里帰りによって海を渡ったものである。第2回目の里帰り桜が誕生するきっかけとなったのが、1980年代初期に、足立区の区制50周年記念事業としてサクラの里帰りが企画されたことであ

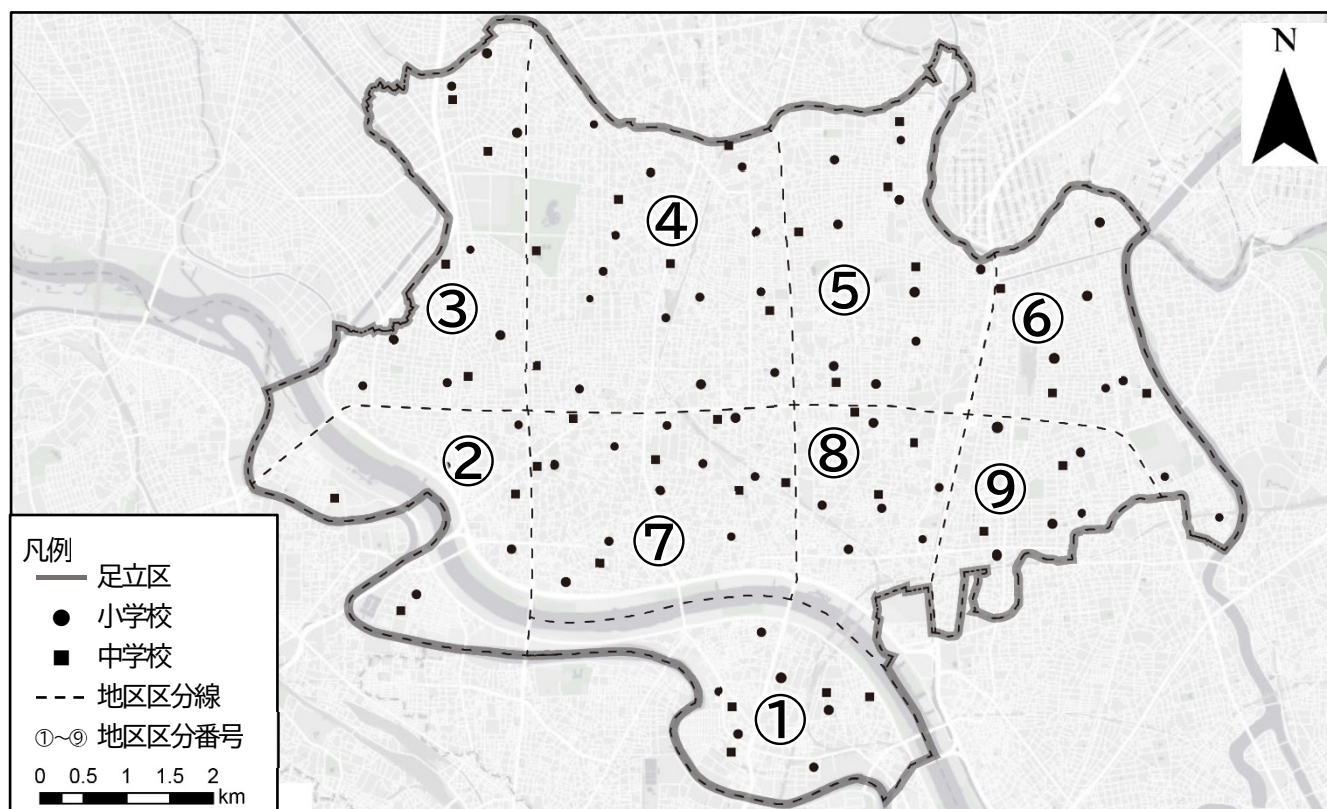
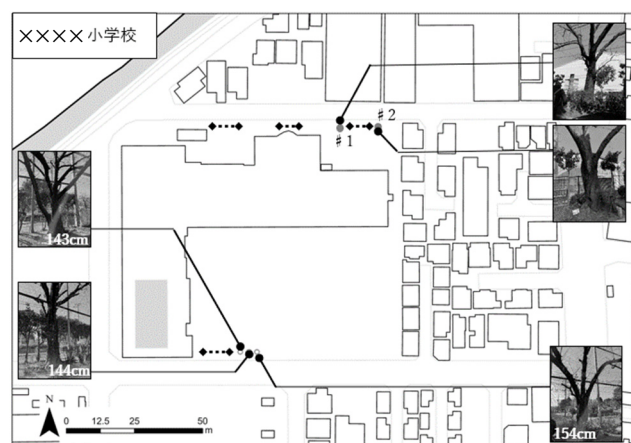


図-4 東京都足立区における現地調査を行った小学校・中学校と地区区分

る。1952 年に行われた第 1 回里帰り時のサクラが活着・生育不良となったことを踏まえ、第 2 回は区の公園課職員が直接首都ワシントンに向きサクラの接穂を採取するなど、周到に準備がなされた。1981 年 1 月に 3 名の区職員が渡米し、その際に持ち帰った桜の接穂とその後空輸された接穂 34 品種計 3,000 本余りが（公財）日本花の会が所有する結城農場でオオシマザクラやヒガンザクラの台木に接木された。このサクラが育成されて 5,100 本の苗木となり、1982～1984 年度の 3 か年事業として区内の小中学校や主要公園、公共施設に植樹された。また、希望する区民に配布され、関連自治体へも贈られた^{13,14)}。



里帰り桜の有無	有
里帰り桜の本数	3本
胸高幹周	#1: 151cm #2: 203cm
立て看板の有無	無し
看板の種類	
備考	

図-5 作成した台帳の例

3. 現地調査による区内小・中学校の里帰り桜の現況

上記の経緯にて 1980 年代にアメリカから里帰りしたサクラは、区内各地に植樹されたが、植樹から 40 年以上が経過しており、サクラの枯死が進んでいる状況にある。また、1 章 (2) で述べた通り、これまで学校における里帰り桜の記録がなかったことや、近年、足立区の学校は統廃合や校舎の改築が進んでいることを踏まえ、里帰り桜を保全し、継承する方法を探るため、以下の通り現況調査を行った。

(1) 調査方法

調査開始時の 2021 年 4 月現在で足立区に存在した計 104 の小中学校（小学校 69 校、中学校 35 校、図-4）を訪問し、学校敷地内にあるサクラについて、「有無」「本数」「位置」「胸高幹周」等について一本ずつ記録を作成した。また、その中から、里帰り桜を示す立て看板版もしくは表示板（図-1 中の右側 2 枚の写真）が付近にあり、里帰り桜と断定できるサクラ（これを「必定木」とする）と、各校の必定木を標準木とし、幹周や枝ぶりが似ているサクラ（これを要調査木とする）について、植樹位置や校門等の学校施設との配置関係を記録した台帳を学校ごとに作成した（図-5）。各学校は主に公共交通機関を使用して徒歩で回ったが、一部の学校には訪問時にレンタサイクルを使用した。また、足立区教育委員会の協力の下、各学校訪問前に事前に電話にて入校と校内の調査許可を得てから調査を実施した（図-6）。

(2) 現況調査結果

1) 里帰り桜（必定木）および里帰り桜候補の数

区全体および学校種別ごとにおける必定木の数は以下の通りであった。まず、足立区内の全 104 校（2021 年現在）において、必定木と認定できたサクラは、合計 60 本（小学校：計 46 本、中学校：計 14 本）であった（図-7）。また、解説版の盤面は消失してしまっているものの、解説版の支柱もしくは台座のみが存在している学校が 7 校（小学校：5 校、中学校：2 校）あり、この 7 校に



図-6 現地調査風景
(島根小学校での幹周測定時)

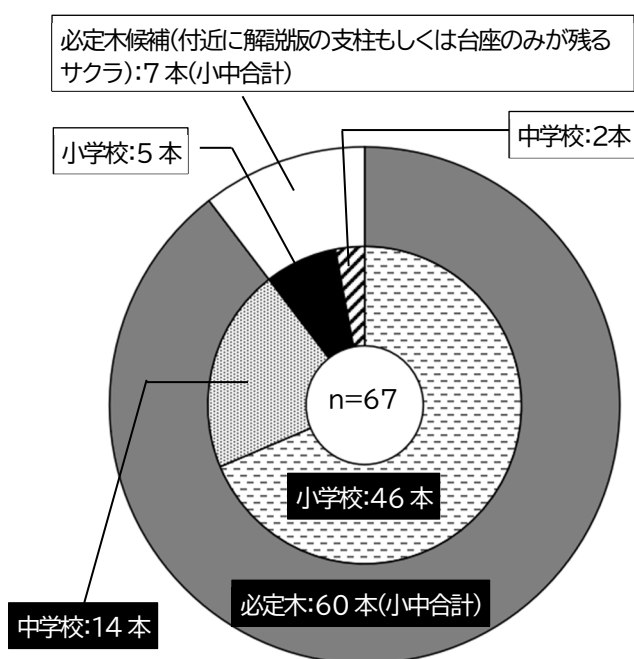


図-7 足立区の小中学校における必定木および
必定木候補(解説版の形跡があるサクラ)の数



図-8 解説版の支柱および台座のみが残っている例

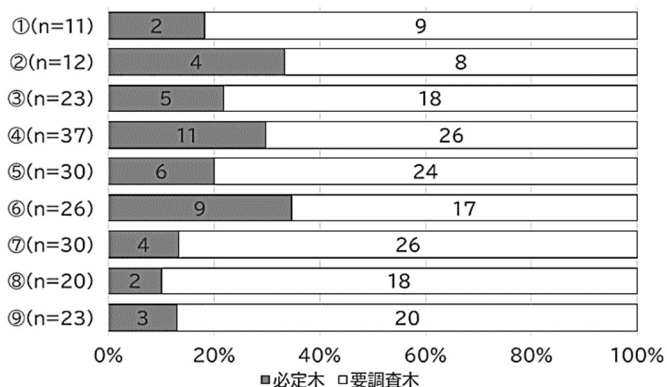


図-9 足立区内の小学校における地区ごとの里帰り桜
(必定木と要調査木)の数

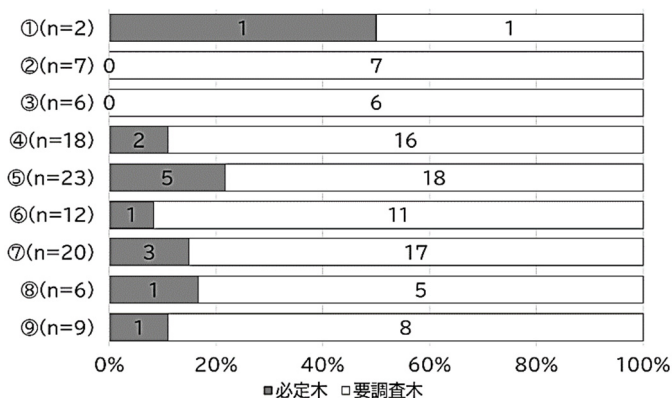


図-10 足立区内の中学校における地区ごとの里帰り桜
(必定木と要調査木)の数

については必定木の候補があると考えられた(図-8)。加えて、各学校の必定木と要調査木を合わせた里帰り桜の可能性のあるサクラの総数は、必定木が60本、要調査木が255本で、併せて315本であった。

次に、里帰り桜の植樹本数には、地区ごとに特徴があると考え足立区内を主要道や河川等の地物によって9つの地区に区分(図-4中の①～⑨)し、この区分ごとに必定木の有無をカウントしたところ、以下の通りとなった。

まず、小学校と中学校の里帰り桜(必定木と要調査木)の木の本数を比較すると、いずれの地区においても、小学校が中学校よりもサクラの木が多いことが分かった(図-9・図-10)。次に、地区と里帰り桜(必定木と要調査木)の本数の関係を、X²乗検定を使って調べたところ、いずれの地区も意差は見られなかった。

4. 学校関係者を対象とした里帰り桜の活用に向けたインタビュー調査

里帰り桜の現況を確認するために学校を訪問する中で、副校長先生や教務事務の方が里帰り桜についてのエピソードを話してくれることがあった。これを踏まえ、各学校の里帰り桜に関する窓口となっていた先生に対して里帰り桜の活用方法に関する調査票を配布し、里帰り桜の教育への活用方針を把握した。

アンケートでは、現在各学校において里帰り桜を教育に活用しているかどうかを尋ねた(図-11)。その結果、小学校では、「授業」、「課外活動」、「周年誌へ掲載」の各方法によって取り上げられたことがある学校があったが、中学校ではすべての学校で「教育活動に活用されたことはない。」「教育活動に活用されたことが

■あなたの学校では、「里帰り桜」が教育活動に活用されていますか。 *複数回答可

①授業(各科目、総合的な学習の時間)などで題材として取り上げられている、もしくは過去に取り上げられたことがある。

②クラブ活動や委員会活動など、課外活動で取り上げられたことがある。

③学校の周年誌等に「里帰り桜」についての情報が載ったことがある。

④学校敷地内の樹木図等に「里帰り桜」の情報が掲載されている。

⑤「里帰り桜」が教育活動に活用されたことはない。

⑥「里帰り桜」が教育活動に活用されたことがあるかわからない。

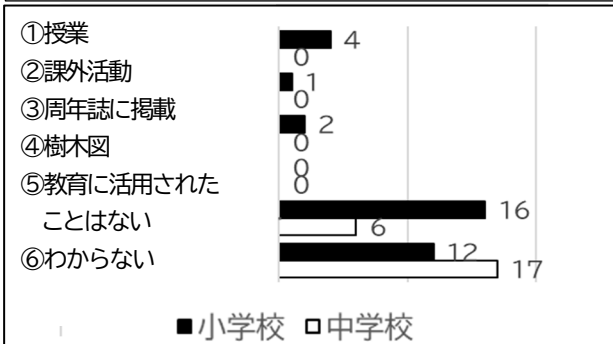


図-11 これまでの里帰り桜の教育への活用経験

あるかわからない。」との回答であった。また、今後、里帰り桜を教育に活用したいと思うかどうかを尋ねたところ、小・中学校双方において、「里帰り桜に関する教材があれば活用したい」との意見が最多であった(図-12)。

5. おわりに

以上、これまであらかわ学会で行ってきた里帰り桜に関する研究の調査の結果を示した。里帰り桜は、足立区ならではの地域資源であり、今後も継承されるべき存在である。特に、小中学校に植樹された里帰り桜は、本来、児童・生徒にとって身近な存在であり、学校教育を通じて親しみをもってもらうことが大切である。

現在、あらかわ学会では足立区民を対象とした里帰り桜の認知度調査を実施しており、今後、里帰り桜の保存、活用および後世への継承に向けた具体的手法の検討を行うフェーズに入る。本稿で述べた調査結果に、現在行っている認知度調査と保存・活用・継承方法の検討を踏まえ、その結果は別途公表する予定である。また、学校現場で使える里帰り桜の教材等の作成を進め、地域資源である里帰り桜を活用したまちづくりを実践していく所存である。

謝辞：本稿の研究の一部は、一般財団法人 水・地域イノベーション財団より以下の研究課題名で助成を受けて行われたものです。
【研究課題名：「地域資源としての「里帰り桜」を活かしたかわづくり・まちづくりの検討—日米里帰り桜ルネッサンス—】

また、調査にあたっては足立区教育委員会、足立区都市建設部公園部局のご協力を、現地調査では、東京農業大学地域環境科学部造園科学科・大学院地域環境科学研究科造園学専攻、文教大学あだちキャンパス・karon 所属の学生諸氏、東京農業大学金澤弓子准教授、樋口恵一様、そしてあらかわ学会事務局の協力を得ました。ここに記して御礼申し上げます。

補注及び引用文献 (ゴシック 9pt)

1) 日本花の会 (1999) : 平成 10 年度里帰り桜現況調査報告書 : 財団法人 日

■今後の「里帰り桜」の活用について。あなたは今後、「里帰り桜」を学校教育の題材として活用したいと思いますか。あなたご自身のご意見・ご意向でかまいません。 *複数回答可

①授業(各科目、総合的な学習の時間)などで題材として取り上げたいと思う。

②クラブ活動や委員会活動など、課外活動で取り上げたいと思う。

③学校の周年誌等や学校敷地内の樹木図等に「里帰り桜」の情報を載せたいと思う。

④「里帰り桜」に関する教材があれば授業や課外活動で活用したいと思う。

⑤「里帰り桜」を教育題材として活用したいと思わない。

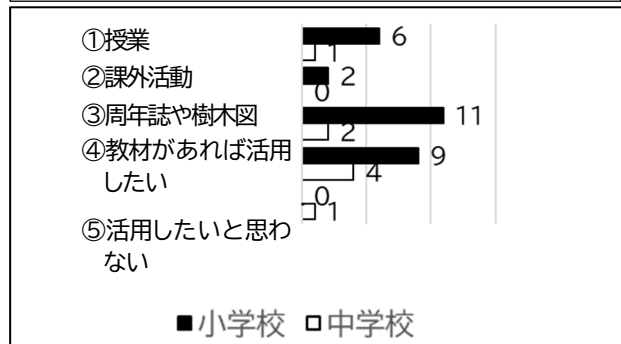


図-12 今後の里帰り桜の教育への活用希望

本花の会, 18pp

- 2) 株式会社 日本花の友 (2000), 平成 11 年度里帰り桜現況調査報告書 : 51p.
(足立区内の上記以外の 51 公園。桜樹木合計 923 本, 内里帰り桜 750 本)
- 3) 日米さくら交流 100 周年記念事業実行委員会 (2012) : 日米さくら交流のふるさと : 東京農業大学出版会, 7-8
- 4) 船津金松 (1981) : 採集と飼育 43 (5) : 東京農業大学出版会, 262-263
- 5) 樋口恵一 (2013) : ワシントン桜のふるさと荒川の五色桜「江北桜譜」初公開 : 東京農業大学出版会, 11-18
- 6) 江北村の歴史を伝える会 (2008) : 江北の五色桜 一荒川堤の桜ガイドブック : 江北村の歴史を伝える会, 169-170
- 7) 樋口恵一 (2013) : ワシントン桜のふるさと荒川の五色桜「江北桜譜」初公開 : 東京農業大学出版会, 37-42
- 8) 江北村の歴史を伝える会 (2008) : 江北の五色桜 一荒川堤の桜ガイドブック : 江北村の歴史を伝える会, 159-160
- 9) 矢作三保三 (1987) : 江北村と足立 : 足立史談会, 163-165
- 10) 『史跡名勝天然記念物 重要文化的景観 登録記念物 指定等目録』(文化庁文化財第二課, 令和 5 年 3 月) なお, 名勝指定地の名勝解除に関しては, 平澤毅 (2017) : 名勝地保護施策に関する研究, p207 などに記載されている。
- 11) 樋口恵一 (2013) : ワシントン桜のふるさと荒川の五色桜「江北桜譜」初公開 : 東京農業大学出版会, 85-86
- 12) 江北村の歴史を伝える会 (2008) : 江北の五色桜 一荒川堤の桜ガイドブック : 江北村の歴史を伝える会, 182
- 13) 樋口恵一 (2013) : ワシントン桜のふるさと荒川の五色桜「江北桜譜」初公開 : 東京農業大学出版会, 68-82
- 14) 足立区 (1982) : 区のお知らせ 昭和 57 年 9 月 20 日発行,